

「その繋がりを大切に」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 11月になりましたが…

伝えたいことが尽きない秋です。神高生の活躍の知らせが途絶えないのです。まずは山岳部。8日から9日にかけて開催された県の新人大会で男子A隊は第3位。女子はA隊が優勝、B隊が準優勝という快挙です。悪天候で完全実施の大会とならなかったそうですが、来年の兵庫開催の全国総体に向けて弾みがつきますね。

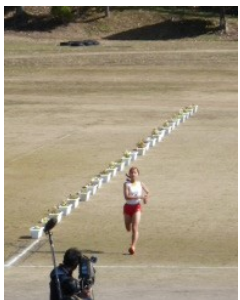
秋季定期戦では振るわなかった卓球部も、県の新人戦において男子団体の部で第9位、男子ダブルスでは岩本くん、勘舎くんのペアが第9位と、ともに来月開催される近畿大会に進めることとなりました。また、箏曲部は第40回兵庫県高等学校邦楽コンクールで審査員賞を受賞したとのこと。これも嬉しい知らせですね。

平安時代の貴族が始めたと言われる1年を四季に分けて風物を語る日本の文化。近年、それが崩れ、「暑い」と「寒い」しかない「二季」時代の到来と言われます。確かに春と秋の存在感が1千年の時を経て薄れた気がします。肌寒い日も時にありますが、神高生の活躍で心の気温だけは冷え込ませないようにしたいですね。

私にとっての秋の恒例行事のひとつに、篠山での黒豆収穫があります。仲間のひとりの実家が篠山にあるのですが、毎年収穫の時期を見計らっては親しい知人を集め、名産の黒豆を採らせてくれるのです。今年で10回目とのこと。都合さえつければ毎年参加させてもらおうのですが、去年は県の高校駅伝大会と日程が重なっていたため参加できず。それでも今年は幸い1日ずれていたので参加できました。黒豆、美味しかったです。

その日の翌4日、私は再び朝から篠山へ。本校がめでたく男女アベック出場を決めている県駅伝の開催日です。私の専門は中学生の時に始めた陸上競技ですが、初任の頃は「若手の顧問が必要だから」との理由で男子バレーボール部の顧問を任されました。生徒と一緒に体育館でひたすらボールを追いかけたものです。

2校目となる母校では当初から陸上競技部の顧問を任せていただきました。部員は皆、教え子であり、後輩でもあります。実に幸せな11年間でした。理想のシーズンは県駅伝で終わること。とはいえ地区予選で敗れ、県大会に出場できない年がありました。11月を前にシーズンを終える切なさは今も忘れないでいます。



さて、今年も篠山では旧知の方々と数多くお出会いできました。平安文学を教えていた頃、私がもっとも力を入れていたのは陸上競技部の指導で、続いて毎日の学級通信の発行、その次が日々の授業だったかな、なんて思います。国語教師としては残念ですが、私には陸上界が故郷みたいなものなのです。そのためどれも嬉しい再会。さあ、号砲が鳴ります。スタート地点に陣取った私は男子1区の工藤くん、女子1区の戸谷さんの大黒柱らしい走りを見届けたあと、徒歩でゴール地点に向かって移動し、男子7区の橋口くんと女子5区の溝渕さんの走りを見守ることができました。

駅伝監督の池田先生が教えてくれます。「女子の11位は神戸高校のこれまでの最高順位13位を上回りました。15位となった男子は体調不良等があり、7人中3人が入れ替わって走りましたが、総合タイムは去年より1秒早かったんですよ」とのこと。走れなかった選手の無念さを背負って走ってくれたのでしょう。繋いでくれたのは襷だけではないのです。

その時、不意に「新谷先生」と呼びかけられます。前任校の生徒たちです。山を登る3区を走った3年生が満面の笑みで話しかけてくれます。「先生に会えるとは思ってなかったので嬉しいです」。



走り終えた選手達の笑顔を眺めながら私は前日の出来事を思い返しました。久しぶりに会えた方の中に、かつてともに陸上界にいた先輩がいたのです。今は車椅子で暮らしています。「県駅伝に重なると今年も新ちゃんに会えなくなるから『日時をずらそう』って僕が提案したんや」そう教えてもらいました。思えば多くの素敵な繋がりに支えられた私の人生。「ずっと大切にして生きたいよな」、誰ともなく呟いてみた秋の日です。